校長室から **ひがしなら通心**

（R元年度）　茨木市立東奈良小学校　川上　隆　No．３８

令和元年１０月15日（火）発行

## 第72回新聞週間です。 １０／１５（火）～２１（月）

１０／１４（月）の読売新聞、産経新聞より

～ 第７２回新聞週間の標語：「新聞を開いて僕は世界を知った」～

日本新聞協会は１０月１５日から２１日までの１週間を「新聞週間」と定めています。報道の使命と責任を自覚・自戒する機会としつつ、広く一般に報道の機能と役割を再確認してもらうことを目的に、昭和２３（１９４８）年に創設されました。

### 子供と意見交わすツール

佐藤亮子さん　教育アドバイザー

**さとう・りょうこ**　大分県出身。津田塾大卒業後、私立高校の英語教師に。結婚後は奈良県で３男１女を育て、全員が東大理科３類（医学部）に合格した。「佐藤ママ」の愛称で、受験や子育てについて各地で精力的に講演を行う。

毎朝、新聞を読んでいる。戦争の記事は、泣きながら読むから、子供には「ママ、また泣いてる」と、よく言われた。

子供に「読みなさい」と言ってもだめ。「この人は93歳で、戦争の時にね…」と、記事を示して語りかけていた。すると、子供も読む。「ママはこう思う」と言うと、「ママはそうだけど、僕は…」。自分の意見が出てくる。

新聞は鍋物と一緒。色とりどりの具材（情報）が入っている。読み切るまでが短くて、分かりやすい言葉で書いてある。子供が読んで考えて、親と意見を交わすのにちょうどいい。

時代はものすごいスピードで変化している。親自身もアップデートしないと。何となくでいいから、時代の流れを知るためにも、読んでほしい。新聞は多様な人に出会える場でもある。自分の生き方を微調整できるのも魅力だ。

構えなくていい。私が新聞を開く時間は１日15分。忙しい時は、気になった記事を破ってかばんに入れ隙間時間に読んでいた。料理をしながら読んで、読み終わったらこんろ周りの油を拭き取りポイ。で、次の日にはもう新品が届く。

子供が四字熟語を覚えるのが面倒と言うから、赤ペンで四字熟語を囲んだ新聞を見せたら、「まじか」と驚いた様子。テストのためでなく、今の勉強が社会につながっていることを伝えるのにも、新聞は格好の材料だと思う。

今、人とやりとりする中心はＳＮＳになった。読み書きはこれからの時代こそ大事だ。だから、子供が18歳までは新聞を近くに置き、使い尽くしてほしいな。

### 裏付け取った情報 貴重

長田 渚左さん ノンフィクション作家

スポーツとの関わりの原点は1964年の東京五輪。小学3年の時、沿道で見たマラソンのアベベ選手の姿に衝撃を受け、初めて五輪に関する新聞記事を切り抜いた。

自分でスケッチブックを購入し、聖火の絵を描き、柔道のヘーシンク選手や体操のチャスラフスカ選手に関する記事や写真を貼って、五輪への理解を深め、世界の大きさを感じた。来年の五輪でも、ぜひ子供たちが切り抜くような新聞を作ってほしい。

今回の調査で、五輪開催期間中に読みたい記事の1位は「日本代表選手の勝敗や順位」だったが、勝敗だけではなく、「なぜ」「どうして」「どのように」勝てたのかという選手の秘策や魅力に焦点を当てた記事もたくさん載せてほしい。テレビには映らない「向こう側」を書けるのが新聞の力だからだ。心の中を耕してくれる記事に期待したい。

**おさだ・なぎさ**　1956年東京都生まれ。女性スポーツジャーナリストの草分け的存在で、フジテレビ系報道番組「スーパータイム」のスポーツキャスターなどを務めた。スポーツ総合誌「スポーツゴジラ」編集長。著書に「復活の力」など。

18～29歳の若年層では、新聞を全く読まない人が半数を超えているが、新聞が必要だと思う割合も多数に上る。こうした世代に、新聞が正確な情報源であることを、どう理解してもらうかが重要だ。

インターネットなどに流れている偽の情報を信じたことがあると答えた割合は、若い年代ほど多かった。新聞の記事と、ネット上の真偽不明の書き込みの違いを意識していない人もいる。

新聞は、記者が出来事を取材して裏付けを取り、どうしたら正確に分かりやすく伝えられるか、専門家に聞いたり、調べたりして、時間をかけて活字にする。そうした情報が戸別配達で家まで来るという世界に誇る情報源だ。新聞では当たり前のようにやっていることを、改めてアピールしていく必要があると思う。

### 読むうちに文章力付く

羽生 善治さん 棋士

**はぶ・よしはる**　1970年埼玉県所沢市生まれ。15歳で四段、中学生棋士に。89年、19歳で初タイトルの竜王を獲得。96年には将棋界初の七冠となった。通算タイトル獲得数は99期。2017年、「永世竜王」の資格を得て「永世七冠」を達成。18年２月に国民栄誉賞が授与された。

将棋を始めたのは小学1年生だった。時を同じくして新聞を読むようになった。新聞には「将棋欄」があり、プロが指した次の一手を考えることが日々の楽しみだった。

最初は将棋欄だけだったが、次第に社会面の漫画、スポーツ面なども読むようになった。「更迭」とか「玉虫色の決着」とか、子どもの時にはわからなかった言葉の意味が大人になるにつれわかるようになり、新聞の活字に触れながら自然に語彙力がついた。

外国で対局をしたり、海外旅行をしたりするようになった二十歳ぐらいからは国際面をじっくり読んでいる。最近ではサウジアラビアにある石油施設攻撃の記事が気になった。インターネットニュースは速報性が最大の武器。それに対して新聞は、ニュースを俯瞰的にみることができて、世界でいま何が起きているのか、動向を把握しやすいという良さがある。

新聞紙面は限られたスペースや、ある程度決まった文字数で記事がまとめられているので、読んでいるうちに理路整然とした文章力が身につけられると思う。ロジックを積み上げるという意味では、将棋の「読み」と共通するところもある。小中学生は、自身が興味を持っている分野の記事から新聞に触れることで、まとまった文章を読む力がつくのではないか。

将棋界に関する記事で言うと、ここ3年くらいで大きく様変わりした。最年少棋士の藤井聡太七段が29連勝という新記録を打ち立て、将棋の話題が1面に載るようになった。本当にありがたいことで、今後は記事を通して勝敗だけではない将棋の価値や文化的な側面を伝えることが棋士の役割だと考えている。

地道な取材に基づき報じるスクープや調査報道は新聞社の原点です。インターネット上に様々な情報やニュースがあふれる時代になっても、新聞の価値はより高まっています。本校の４・５年生も２学期から、新聞を使っての学習（NIE：Newspaper In Education）に取組んでいます。